HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	聖母マリアの国クロアチア
Author(s)	丸山, 沙那子
Citation	北大宗教学年報, 3・4合併号, 16-17
Issue Date	2023-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88696
Type	other
File Information	3_4_03_p16-17.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【修士論文要旨】

聖母マリアの国クロアチア

丸山　沙那子

父性のキリスト教会から生まれ発展してきた聖母マリア信仰は、世界中に広がり、その熱狂的な信仰は神をも凌駕すると言えるかもしれない。彼女の聖性と神秘性は常に議論の対象となる存在ではあったが、むしろそれこそが聖母マリアの存在の大きさを証明するのではないだろうか。時代を経て様々な称号が付され、聖性が高められていった聖母マリアは、今や宗派の壁をも越えて人々を魅了し続けている。

クロアチアにおける宗教は、中世以前から近代に至るまでの歴史において、国家的、社会的アイデンティティの構築に重要な影響を及ぼしてきた。特に、セルビア中心のユーゴスラヴィア王国建国以降、社会主義ユーゴスラヴィア政権下におけるまで、カトリック教会は反セルビア、及びクロアチア人の民族的自立を掲げる民族主義と結びつくことにより、民族的アイデンティティの象徴となり、「クロアチア人である」ということと「カトリックを信仰している」ということとはイコールで結ばれていた。

現在のクロアチアは他のヨーロッパ諸国、キリスト教国と比べても宗教的であり、かつカトリック教会が優勢の国家である。1970 年代までネイティヴのクロアチア人聖職者の聖人がいなかったために、クロアチア人の女王である聖母マリアがクロアチアにおけるカトリック教会の中心的信仰であり、クロアチア人の民族的シンボルであった。聖母マリアの生家がトルサトに出現したことも、聖母マリアをクロアチア人の一員として考え、ネイティヴの聖人とみなすための出来事だったのであり、だからこそ神であるキリストではなく、聖母マリアが自分たちを守る存在となった。「クロアチアの女王」や「クロアチアの最も忠実な擁護者」という「自分たちの」聖母マリアを強調する聖母マリア信仰は、民族主義と結びつくことで自分たちが聖母マリアの特別な加護を受けた選ばれた民族であると感じさせた。このことからクロアチアにおける民族としてのアイデンティティを考えた際、宗教そのものがクロアチア人というアイデンティティを作ったということができる。クロアチア人の宗教であるカトリック教会は、元々育まれていた聖母マリア信仰と民族主義を結びつけることにより、「聖母マリアのクロアチア教」とも言える信仰体系を作り上げたと考えられる。

クロアチアの歴史は、常に異民族の脅威にさらされ、様々な国の統治下に置かれてきた。クロアチア最大の聖母マリア聖地であるマリヤ・ビストリツァや、ボスニアヘルツェゴビナのクロアチア人の土地メジュゴリエの聖母マリア出現、さらにユーゴスラヴィア政権下に生きるクロアチア人たちにとって生きた聖人とも言える存在だった福者アロイジエ・ステ

ピナツの存在とその悲劇的な死は、民族感情と信仰の結びつきの顕著な例である。別の文化や宗教が入り込むことで、自分たちのアイデンティティが脅かされるという、文化的・社会的変革の過程において、宗教がそれに対応し対抗する手助けをする。言い換えれば、宗教が自分達の民族的アイデンティティを保つための手段となったのである。

クロアチアにおける聖母信仰が現代まで、若い世代にも受け継がれ、鮮やかに輝いているのは、長い歴史の中で、聖母マリア信仰そのものが彼らの民族的アイデンティティとなったこと、そして彼らにとって外部からの脅威がいまだ新鮮な記憶であり、聖母マリアはその悲しみや、結果として異民族・異教徒たちから自分たちを守ることができた喜びを分かち合った仲間であり、これまで長い歴史の中で自分たちとともにあり、自分たちを守ってくれた彼女の存在が過去の伝承ではなく、自分たちの中にリアルタイムで存在しているからであると考える。

聖母マリアは、クロアチアの人々にとっての女王として、また守護神として、今も君臨し続けている。